

17世紀後期ロンドンの建築プロジェクト

——新発見の著作及び異版の解題を含めたニコラス・バーボン再考

高橋 裕一

はじめに

- 1 ニコラス・バーボンの著作目録
- 2 『ビルダー弁護論』, その初版と再版
- 3 市街地開発・建築を論じた初期冊子 (1678年), 及び同年刊行の異版
- 4 展望

はじめに

17世紀イングランドの重商主義経済論者とされるニコラス・バーボン (ベアボウン, ベアボウンズ: 1637 or 40 ~ 1698 or 99年) は多くの顔をもった人物である。共和政下の指名議会議員を務めた皮革業者プレイズゴッド・バーボンの子としてロンドンに生まれ, ネーデルラントへ留学, ユトレヒト大学で医学博士の学位を取得して帰国, 医師を開業するが, ほどなくペスト流行・大火を経て, ロンドン市街地の投機的開発・建築事業, 火災保険業, 土地銀行企画ほか多様なビジネス分野へ転じた。イングランドにおいて17世紀のとりわけ後半, 都市では植民活動などに並行した海外貿易志向が強まり, 農村でもエステイト経営や農事・農法の効率化が漸次進行したが, 農村・都市を問わずに展開していた種々の新規「プロジェクト」が営利企業だけでなく, 社会事業ほか公共的な分野にも及んでいた。そういった潮流のなか, 大都市の疫病や火事といった災害に対応し, それを逆手に取りつつ, バーボンは多岐にわたる新企画・事業を推進, その中核がロンドン市街地開発・建築にほかならなかった⁽¹⁾。関連諸事業の裾野が広範なこの業域に, 彼は当時の人口を新たに吸収し得る, 有望な雇用創出先を見出し, その点を繰り返し唱えている。やがて父の如く議会 (下院) 議員に1690, 95年の2回当選, フリー・トレード擁護論者として知られた。大原社会問題研究所が創立期に研究員を欧州に派遣して収集した社会労働関係図書のなかにもバーボンの著作が含

(1) project (projector) については, 邦語では上田辰之助氏が『蜂の寓話——自由主義経済の根底にあるもの』, 75-76頁で印象的に触れている。バーボンより若い世代のダニエル・デフォーは『プロジェクト試論』で詳細な議論を展開し, バーボンにも言及している。デフォーの挙げている新規プロジェクトには共済保険・年金, 公道, 障害者保護, 慈善富籤, 破産者救済, 各種教育機関ほか, 公益性の高い領域の事例も少なくなかった。農村部の諸プロジェクトの役割を強調しつつ, その全体像や商工業振興上の意義を論じた経済史家 J. サースク氏の研究, バーボンを projector の観点で捉えた経済学説史家 W. レットウィン氏の研究などを参照。Daniel Defoe, *An Essay upon Projects* (1697) ed. by J. D. Kennedy, M. Seidel and M. E. Novak (1999) pp.47, 176-177.

まれている。本稿では近年の研究や新たな探索を踏まえながら、彼の著作をめぐる諸問題、とりわけこれまで比較的看過されてきた市街地開発・建築論系統の再版、あるいは新発見冊子及びその異版などに限定し、若干の論点を取り上げて記述したい。（なお、引用文中などの〔 〕内は筆者による補足）

1 ニコラス・バーボンの著作目録

まずバーボンの著作系統についてこれまで知られてきたものを、ジャンル別に整理しておこう。

- (1) 火災保険 (N. [icholas] B. [arbon], *A Letter to a Gentleman in the Country giving an Account of the Two Insurance Offices* (1684). ; Dr. Barbon, *An Advertisement. being a Proposal by Dr. Barbon and Partners for Insuring Houses and Goods from Fire, by a Water-work*… (1694))
- (2) 市街地開発・建築 ([Nicholas Barbon], *An Apology for the Builder: or a Discourse shewing the Cause and Effects of the Increase of Building* (1685 ; 1689))
- (3) 利子率や通貨問題を含む経済時論 (N. [icholas] B. [Barbon.] M.D., *A Discourse of Trade* (1690) ; バーボン／ノース／ダヴェナント 久保芳和他訳 (1966年) 『交易論・東インド貿易論』 (東京大学出版会), 1-62頁, 併せて解説 [久保芳和] 1-14 [195-208] 頁 ; [Nicholas Barbon], *An Answer to a Paper entituled Reasons against Reducing Interest to Four per Cent* (1694) ; Nicholas Barbon, *A Discourse concerning Coining the New Money lighter*… (1696))
- (4) 土地銀行設立等の政策提唱 ([Nicholas Barbon?], *An Account of the Land Bank, shewing the Design and Manner of the Settlement* (1695) ; [Nicholas Barbon?], *The Settlement of the Land Bank* (1695) ; N. [icholas] B. [arbon.], *A proposal for raising the publick credit by setting up an office for transferring and discounting tallies* (1697))

(1) の *A Letter to a Gentleman*… は火災保険をめぐる友愛協会との論争を反映するパンフレットで、続く *An Advertisement*. … はタイトル中の表記 (*Dr. Barbon and Partners*) から分る通り厳密に誰の執筆によるか定め難い。

(2) の『ビルダー弁護論』はバーボンの主要事業であるロンドン市街地開発・建築を訴え、一部世論の批難に論駁したもので、本冊子を初めてバーボン著と断定したのはS. バウアである⁽²⁾。

(3) のうち2点はバーボンの代表作とされ、下院議員就任以降の発刊、当代の重商主義論者たる立場が顕われている。広く知られるのは1690年刊行の『交易論』と思われるが、末尾に掲げた『重量を軽くする新貨幣鑄造についての論説』は最長の著述でフルネーム署名があり、D. ヴィッカーズは『交易論』を上回る経済学史上の意義を認めている⁽³⁾。

(2) N. G. Brett-James (1933) 'A Speculative London Builder of the Seventeenth Century, Dr. Nicholas Barbon', pp.131-133 ; (1935) *The Growth of Stuart London*, pp.339, 351 n.57 ; S. Bauer (1890) *Nicholas Barbon*, p.562 and n.3.

(3) *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, vol.1, p.189. (3) の系統に属す代表作2点の初版原典は、いずれも大原社会問題研究所所蔵。

(4) の系統も重要だが、すべてブロードシートかパンフレットの類。1695年刊行の匿名2点は久保芳和氏によれば「バーボン独自の著作ではなくて、むしろ [ジョン・] アスギルとの共著とみるべきであろう」とされる(訳書解説3, 197頁)。1697年刊行のシートには末尾にN.B.署名があり、当時バーボンが下院で支払手段たる合札 tallies の運用改善を提案中だったことなどを勘考し、筆者はこれを彼の単独作とするのに同意したい⁽⁴⁾。

以上にバーボンの著作群を簡略にまとめたが、本稿前半では『交易論』に比し知名度の低い上述『ビルダー弁護論』を取り上げ、その初版と再版の記述を対比する。後半では近年新たに発見された、上の目録にない、別の先駆的な冊子と異版(同年刊行)を紹介してささやかな分析、解題を試み、以て彼の所説に(2)の系統の占める比重の大きさを新たに指摘したいと思う。

2 『ビルダー弁護論』、その初版と再版

『交易論』ほか一点からなる(3)の系統ほどの知名度はないが、(2)に該当する『ビルダー弁護論、すなわち建物増加の原因とその諸効果を明らかにする論説』(無署名。1685年初版、1689年に第2版)も、逸することのできないバーボンの著作である。36ページからなる本冊子では問題提起の序論に続き、ロンドンに見る近年の建物増加の諸原因、及び新築建物の拡大が当該都市(シティ)、農村部(カントリー)、そして政府統治にそれぞれ及ぼす効果が説かれ、市街開発と建造物増加のもたらす一国へのメリットが巧みに強調されている。『交易論』に先立つこと5年、短いものながら当時の経済論議の上で意義深い指摘をいくつか含んでいた。例えば、①世論や議会筋から強い懸念や規制の声が高まっていたロンドン市街地の著しい膨張や建物増加に対し積極的な擁護と開発推進論を展開、とりわけ最大の雇用を創出するトレードを最重視する立場から関連業種の範囲が広い建築業に潜在する雇用数の規模に着眼し、新しい都市型産業の発展性を予示したこと。②建築市況、需給に粗雑ながら人口論的考察を加え、建築物の種々等級や空き家の存在にも言及していること。③貧民を含む他人の労働から生じる財貨が(土地所有者ら)富裕者の地代になると捉え、同時に富裕者の欲望と商品供給との関係を市場の全体趨勢のなかで究明したこと。④主に「シティ(大都市、具体的にはロンドンを指す)」と「カントリー」の対比考察を展開し、大都市に見る消費増加を、農村部の生産性向上を促す要因としても積極的に肯定したこと⁽⁵⁾。以上は後の『交易論』で詳密に展開される議論とのかかわりも深く、注目に値する。とりわけ、P. Slackによれば「1世紀の間、大都市に対するカントリーの批判者が厳しく論難してきた都会の浪費は、今や経済成長の一要因とされるに至った。この点は、経済理論に対してではないにせよ(彼が名声を得るに値する側面は他にある)、結果として経済史に対するバーボンの最大の貢献と言える」⁽⁶⁾。また、建築業が雇用を創出することを彼は『ビルダー弁護論』のみならず、本稿第3節で紹介する先行の著述でも力説しているが、『交易論』では「浪費 prodigality は人にとっては有害な悪徳 vice だがトレードにとってはそうではない。…(中略)…貪欲 covetousness は人にとってもトレードにとっても

(4) *The History of Parliament: The House of Commons 1690-1715*, vol. III, p.133.

(5) [Nicholas Barbon], *An Apology for the Builder*… (1685 ed. [eebo-0062]; 1689 ed. [eebo-0059]), *passim*.

(6) P. Slack, 'Perceptions of the Metropolis in Seventeenth Century England', p.176.

有害な悪徳である」と断言するに至る。消費支出こそ大きく雇用を生むと見るバーボンの所論を踏まえ前出ヴィッカーズはこの箇所を引用し、「[バーボンは] 次の[18]世紀に提唱されるようになる、浪費及び雇用創出を伴う支出の議論を予示していた」と総括する⁽⁷⁾。

同時に『ビルダー弁護論』には17世紀後期ロンドンのデヴェロッパーターたる著者の実体験が投影されている。バーボンの見るところ、大火から20年足らずでロンドンは「立派な家屋の軒数、広場の多さと壮大、住民の裕福といった面では[そこは]世界で最大の、もっとも見事に建設された、もっとも豊かな都市と認めねばならない」と描かれるほど復興を遂げ、現今なお「旧い街並みに毎年新しい街並みが加わっていく」急速な成長過程にあった。そうしたなか、かつての郊外区域が建物や街路の新設などによって整備され、時価＝賃料が大幅に上昇しているさまを伝える記述は界隈の開発ビジネスに携わった当事者ならではの観察⁽⁸⁾といえる。そもそも『ビルダー弁護論』の目的は、ロンドンのシティや近郊地の開発事業で渦中にあり盛名（時に悪名）を馳せていたデヴェロッパーター本人が、幾度か議会で議論されてきた建築規制に反駁すべく発表した自己弁護かつ宣伝にほかならない⁽⁹⁾。ちなみにバーボンの事業企画上、市街地建設・開発は当然ながら火災保険業と密接に結びついており、本稿第1節に掲げた著作分類の系統(1)も、自ら立ち上げた保険オフィスの広告宣伝（その点では土地銀行設立構想とも結びついていたと思われ、系統(4)もまたその宣伝）といえる。なお、（初版が刊行された）1685年の6月17日、ジェームズ2世第1議会の下院はモンマス公及びアーガイル伯の反乱に対する鎮圧費用の財源を全院委員会で審議した結果、新しい土台に新築される建物へ原則課税する議案が採択されている⁽¹⁰⁾。こうした事実との因果関係はにわかに判断し難いが、間欠的に繰り返される新築規制・課税の動きや、以前起ったグレイズ・イン法学院所属バリスターらとの諍いなど世間の反感に抱いた危機意識がバーボンに本冊子を執筆刊行させる動機となったことは十分想像できる。なお、本稿第3節に後述の新発見著作から、かかる規制動向には1678年頃の段階で投機的建築業者バーボンが早くも憂慮を示していることが判明する。

既述の如く本冊子は1685年に初版が発刊された後、相応の修正を加えた再版が89年に刊行されている。4年を経た再版では時代や状況の変化に対応した微調整が加えられているほか、術学的な引用文が省かれるなど、読者への訴求を考慮しあらためて持論を世に問う体裁となっている。以下、初版と再版の原本をテキストに、記述の異なる箇所のいくつかを対比してみよう。若干の表記修正部分（誤記と思われる表記の訂正や、大文字を小文字へ変更したり、A [a] ndをF [f] orへ変更したりしている箇所は論旨に変更や影響はない）を除き、刊行がそれぞれチャールズ2世崩御（ジェームズ2世即位）、次いで名誉革命の年、という相違や状況変化を窺わせる変更を若干挙げてみる。

(7) *A Discourse of Trade*, pp.77, 39, 68, 62-63; 『交易論』前掲訳書, 52, 31, 48, 45頁。*The New Palgrave: ...*, vol.1, p.189.

(8) *An Apology*, pp.2, 20-23. 本稿第3節に示す新発見著作にも市街拡大への言及がある。

(9) *op. cit.*, pp. 3, 36.

(10) *Journals of the House of Commons*. From Oct. the 10th 1667 to Apr. the 28th 1687, vol.9, 1803, p.739.

p.3：初版の「天地創造の最初の祝福のとき以来，[人々は] 増殖し続け，[現今の] 慈悲深い国王の優れた統治に至っている」が，再版では「天地創造の最初の祝福のとき以来，財産が十分に保全される優れた統治の下で（人々は）増殖し続けている」へ差し替え。

p.36（再版），p.37（初版）：初版の「そして現今，王位に就いておられる勇壮なる君主の統治の下，[ロンドンが] 世界的な大都会 Metropolis となる機会もあったろう。」が，再版では「そして現今，[ロンドンのような都市の存在ゆえに] フランスの台頭を抑え込む機会が随分たやすく生じたであろうし，[ロndonは] 世界的な大都会 Metropolis となり得るであろう。…」（以下に続く部分も to have caused, to have made が [might] cause, might make に変更）へ差し替え。

以上から，わずか4年で急速に変わった政治（とりわけ王位をめぐる）状況に対応し，再版では注意深く表現が改められていることが分る。ところで彼は格別自らの政治上の立場を表明していないが，例えば初版で用いられたオリヴァー・クロムウエルの蔑称（「篡奪者 the Usurper オリヴァー」p.29）が再版でも維持される（同ページ）。この語は本論説より以前にすでに用いられていたことが，本稿第3節で後述する如く判明するが，クロムウエル本人への反感か，新規建物土台に「ビルダーにとって重く不当な賦課金」（初版，再版 p.29 の原文では a Tax）を徴した政策への反感かは，推測し難い。

再版で記述内容に少なからぬ変更が加えられた重要箇所は以下の通りである。

p.2：ロンドン市民たちが新築家屋のせいで古い既存家屋の賃料 Rent やトレイドが減少すると危惧している旨の記述に続き初版で「[市民たちは] 壊れる前の古い家から逃げ出すと言われるネズミの如く，自分たち住民がにわか引越す事態になりかねないと想像している。」が，再版にて削除。

（なお，上述の下線部分について再版では，このシティの賃料やトレイド，となっている。筆者の見るところ前者のトレイドは狭義の家屋取引・売買に，後者のトレイドはどちらかと言えばもっと広義に，それぞれ解し得る。）

p.5：「また富裕者の財力が増えるにつれ，その欲望 wants も増大するのである。」に続いて初版で「すなわちサー・ウィリアム・テンブルが言うように，人を分類する際は，[現に] 何を享受している enjoy か，よりむしろ何を欲している want か，を規準にする方が分かりやすい。」が，再版にて削除。この部分に引き続く，「そしてトレイドの枢要な本分は，人々が必要とする入用 occasions を満たすあらゆる種類の商品 Commodities をつくって売ることにある。」が，再版では「なぜならトレイドとは，そうした欲求 wants を満たすあらゆる種類の商品 Commodities をつくって売ること他にないからである。」へ差し替え。

さらに，比較的大きな変更は以下のようなものである。

pp.19-20：初版

「しかし確かなのは，入用とされる occasion for だけの家屋が毎年建てられていないこと。なぜなら家屋が建てばそこに借家人 Tenants が現れ，さらに毎年新たに建てる継続性が生じるためである。というのも市場に自分たちの商品が過剰供給され，すでにつくった商品に対する入用がない場合，新たな入用がそれを求める時まで増産ないし市場出荷を差し控えるという，他のトレイド従事者 Traders と同様な行動をビルダーもとるだろうから。そしてすでに完成している家屋を賃貸できないとビルダーが気づけば，それ以上の建造を止めるだろうから，彼らを妨げる議会制定法は不要である。」

：再版

「なぜならビルダーはどの年度でも、入用とされているであろうと自分が考える以上に家屋を建てようと企てることはないからである。市場に自分たちの商品が過剰供給されている場合、新たな入用がそれを求める時まで増産を差し控えるという、他のトレイド従事者と同様な行動をビルダーもとるだろうから。ところがこうした場合の経験が不足しているため、ここ10年間建築業によってそれ以前に得られていた以上の金額が、同じ建築業によって失われているのである。なぜなら現実に入用とされた以上の棟数の家屋を建てることにより、またソーホーやアルビマールの敷地その他の場所に見られる如くビルダーの建てた家屋が空いたままになっていることで、20万ポンドを下らない賃貸料や利子の損失が生じているから。これがビルダー〔の活動〕を著しく阻害したので、ここ3、4年の間につくられた建物は非常に少数にとどまっている。従って建築を妨げる議会制定法は不要である。」へ差し替え。

この記述変更は直近の状況、とりわけ空き家の存在が建築市場に与える影響という、恐らく急速な成長又は復興の期間がある程度経過した後の市街地に特有な現象が指摘されている点で見逃せない。

また末尾の部分では、以下の変更もある。

p.31：「さてこの都市を一国の頭部と想像するようなジェントルマンが、そうではなくこの都市を心臓のようなものと想定すれば、その成長のさまが過大と怖れるようなことは金輪際あり得まい。」に続いて初版で「なぜなら身体に比して心臓が大き過ぎるなどといった病気のことを私はこれまで一度も読んだことがないから。もしわれわれがマキアヴェッリの見解に従えば、こういった直喩がもっとも適切である。すなわち彼曰く、都市の市民は良き顧問官 Counsellors を輩出しない。市民たちは非常に儉約や刻苦精励によって財を築いたので、悪徳を罰するに厳格に過ぎ、美德へ報いるに物惜しみし過ぎるのが通例であるからと。」が、再版にて削除。

p.34（再版）～p.35（初版）：初版で「新築の建物は国王陛下の歳入 Revenues を増やす。」に続き「〔建物を介し〕歳入増加に資する炉税 Chimney-Money によってだけでなく、」（以下再版でも維持される「家屋を建て、そこへ家具を備え付けるための資材 Materials に支払われる関税収入によって〔も〕。」へと続く）が、再版にて削除。

初版と再版の刊行はバーボンの下院議員就任（1690年）の5年前及び1年前で、とりわけ再版刊行の頃に彼は明確かつ現実的な政治（家）意識で立候補に備えていたと見られる。また無署名とはいえ彼の著作で一年以上の間隔を取り、断片的であれ全体に訂正を加えての再刊は『ビルダー弁護論』のケースだけである。実体験が盛り込まれ、自説がリアルかつ雄弁に披瀝された本冊子の意義は、以上を考慮すると決して小さくはない。

3 市街地開発・建築を論じた初期冊子（1678年）、及び同年刊行の異版

ところで本冊子の初版刊行に先立つ7年前、内容の類似した冊子がやはり無署名で発刊されていた。1678年刊行、20ページからなり、表題は『新築の建物や都市・市街地の拡大が一国にもたらす大きな利点を明かす論説』（以下、表題を『新築の…』と略記し、これを版本Aとする。末尾の【参考文献】中、史料文献欄を参照）。本冊子の説く主旨をまとめれば次のようであり、『ビルダー弁護論』と論旨が非常に似通っている。

主旨：昨今，都市部とりわけロンドン郊外，すなわち「カントリー」に対比される「シティ」での新築建物の増加に批難や規制の動きが高まっているが，かかる主張は事実無根で何らの論拠もなく，むしろ建物業は関連する手工業，建物家賃なども含めト Reid 全体を増進させ，現実に広く雇用を創出・拡大，人口増にも寄与し，人々を富ませる存在である。新築の建物は国力を高め，国の誉れにもなる。新築の建物は歳入を増やし，君主らにとって民の統治も容易にする⁽¹¹⁾。

記述細部を見てもテーマや事例が『…弁護論』と重複している箇所が不自然なほど多い。『新築の…』（版本 A）と『ビルダー弁護論』（初版 [1685 年]）を対比し，記述自体の類似が，別人の著述とは思えぬほどきわめて明瞭な箇所をいくつか挙げれば，概略以下のようなろう。

『新築の…』（版本 A）	『ビルダー弁護論』（初版 [1685 年]）
天地創造以来の人口増殖：pp.25 集まって住む手工業者 100 人の例：pp.4-5 競合 (emulation)：p.5 オスマン (人) 君主 the Otta [o] man Power による征服・統治策：p.8 歳入増加に資する炉税，関税：p.8 カントリーに見る土地改良：p.14 国内人口とプランテーション構築のかかわり：pp.14,18-19 建築規制と「篡奪者オリヴァー」による課税策批難：pp.17-19 ホラント諸邦，アムステルダム市の記述：pp.19-20	p.3 pp.32-33 p.33 p.34 p.35 (炉税の部分は再版にて削除。本稿第 2 節参照) p.25 pp.28-29 pp.28-29 pp.35-36

時代や状況の推移などに伴い記載は，紙幅，内容詳細ともに異なってはいるが，テーマに明瞭な類似性のある箇所を数点挙げれば概略以下のようなのである。

『新築の…』（版本 A）	『ビルダー弁護論』（初版 [1685 年]）
旧約聖書記述：pp.15-16 ロンドン奉公人の年季明け後：pp.9-10 ロンドン市街，拡大する区域など：pp.3-4,18 (当時を反映した詳細な記載。例えば，いち早く自ら開発に携わったストランド街区の記述などがこの冊子に初出) 「死亡 (者) 記録 general Bills of Mortality」等を踏まえた人口や賃料の推移：pp.11-12, 16-18 最大雇用を創出する建築業，ビルダーの役割の強調：pp.2-3, 13, 18-19	pp.6-7 pp.18-19 p.21 (ストランド街区の記述などが部分的に再録) pp.19, 27-30 pp.24-25, 31-33 (左に比し，一層顕著な強調)

(11) *A Discourse shewing the great advantages that New-Buildings and the enlarging of towns and cities do bring to a nation* (London, 1678) [版本 A], *passim*.

『ビルダー弁護論』ではなく『交易論』中の記述と類似する箇所を一点だけ挙げる。

『新築の…』（版本 A）	『交易論』
「あらゆる商品の価額 value は、当該品に存する入用 occasion と必要 necessity に由来する」： p.13	原典 p.18；訳書 18～19 頁

本冊子固有に見られる興味深い指摘や記載もある。いくつかを挙げれば概略以下のような（表記は『新築の…』版本 A に記載のページ）。

p.2：「労働 Labour と技術 Art の成果 effects が富 Riches である…（以下略）。人は誰も、そうした技術や手段 [の増進] Wayes から利益を手にできるのでなければ、[わざわざ] 自己の時間や労働を費やすとは思われない」という記述。
p.2：あらゆる国々で、独立した生計を立て得る財産に恵まれた富者 1 人に対し、生計の資を得るため自身の労働を提供するほかない貧者 100 人以上、とする比喩。
p.8：大都市における観光業の意義。
pp.14-15：カントリーに生じている地代下落の対策としての利子率引下げ、及び外国人帰化・市民権付与及びそれを促す議会制定法。
pp.15-16：ユダヤ・イスラエルの慣行がもたらした、人の増殖への悪影響。
pp.16-17,19：グラント氏の所見。（『ビルダー弁護論』での言及とは別個の引用）

なお前出の Slack は、この冊子の末尾の記述（p.20）を、都市市街の拡大を強く擁護する社会的経済的視点を打ち出した最初の試みと捉え、それが『ビルダー弁護論』（*An Apology* (1685 ed.), p.37）に至って一層明確化されたとする⁽¹²⁾が、そこに展開する議論の核心的な諸部分は早くも本冊子で提示されているのである。

2000 年、Slack は初めて、『ビルダー弁護論』と類似した論点や文体（argument and style）に照らし、また内容（content）から判断して、本冊子（版本 A）を含む 3 点をバーボンの著作とした。筆者としては論旨、個別の記述内容等に鑑み、少なくとも『新築の…』は『ビルダー弁護論』と同じ著者による先行著作の可能性が高いと考え、この点で Slack の所説を採りたい。

なお Slack によれば以下 2 点（いずれもブロードシート）もバーボン著とされる。

・ <i>A Particular of the New-Buildings within the Bills of Mortality, and without the City of London</i> (1678) (<i>Short-Title Catalogue of Books</i> …, vol.3, item P594B in p. 23)
・ <i>Arguments concerning the New-Buildings in the Parishes within the Weekly Bills of Mortality, without the City of London</i> (1678) (<i>Short-Title Catalogue</i> …, vol.1, item A3641 in p. 83)

前者に関しては、すでに N.G. ブリット-ジェイムズが論旨のきわめて類似した片面刷りパンフ

(12) Slack, 'Perceptions of the Metropolis', p.178 and n.77, 78.

レットの存在を指摘し、この事実はスラックも註記している⁽¹³⁾。後者を見ると全12項目の論点中5項目に *Cock upon Littleton* といった法令の典拠箇所が付され、筆者はバーボン側近の（共同事業者で法廷弁護士のジョン・アスギルほか複数存在した）法曹関係筋による代筆、又は補筆の可能性を今のところ排除できない。

さて、『新築の…』がバーボン著とすれば、これまで看過されてきた彼の処女作（の1つ？）ということになろう。デヴェロッパたる実体験はすでに本冊子に示されていたと見るべきで、また1678年の刊行（スラックの指摘が正しければ同年、他にもバーボンの小冊2点が発行されたことになる）という事実にも新たに着目せねばならない。スラックは、ロバート・フックを通じてバーボンと面識があったとされる農業作家ジョン・ホートン（1640 or 45頃～1705年）の主張と併せ、本冊子に見られるバーボンの主張に着眼し、その背景をなす一端を1674年以降の対仏関係に対応した議会下院の動向に求めようとする。そして、スラックによれば、『新築の…』が刊行される1年前の1677年、ルイ14世治下のフランスに対抗する軍備調達のため、ロンドンの新規建造物賦課金（かつて1657年に制定、王政復古期に撤廃）の復活論議が起こっていたが、ロンドン市街地の建築・開発業者たるバーボンは危機感を抱き、フランスからの輸入品規制案（1678年）に危惧するホートンとともに反駁の筆を執り当面する政論の潮流に抗した、とされる⁽¹⁴⁾。本冊子が当時の議会動向に反応した訴えだった公算は大であろう。また同時に、D. ウィルキンソンとS. ウィンの推測する如く1680年、彼が早くも下院立候補の野望を抱いていたとすれば⁽¹⁵⁾（筆者が付け加えれば、建築事業の運営資金に窮し大法官府裁判所での訴訟遅延戦術で債権者の追及をかわしてきた身として議員特権による債務回避を策しただけでなく、父の影響や建築業界の利権擁護も当初の念頭にはあったろう）、その2年前に無署名とはいえ本冊子（に加えブロードシート2点？）を世に問うたのは、自身にのみ可能な喫緊の提言という認識を抱いていたと推測できる。

ところで上記冊子の関連において筆者は、スラックが閲読したと思われる版本Aとは別に、表題がまったく同じで記述内容も大部分そっくり重複する、やはり1678年刊行の異版（仮に版本Bと呼ぶ）を発見するに至った⁽¹⁶⁾。『新築の…』の版本AとBを比べると表題はまったく同一、そればかりかタイトルページの印字・デザイン、及び本文の印字が似通っており、著者名と同様、表記はされていないが恐らく同じ出版・印刷業者によるもの（ことによると著者自身が印刷・出版に関与？）と思われる。ただし版本Bのページ[1]では、版本Aページ[1]冒頭の表題（4行）がなく、直ちに本文に入る体裁となっている。版本B第一段落は、いくつかの語句の異同はあるものの版本Aと同一と見てよい。翻って、以下に続くページ[1]第二段落（版本Bの24行目以降、版本Aの25行目以降）からページ[2]の中途（版本Bの35行目まで、版本Aの21行目まで）

(13) Brett-James, *The Growth of Stuart London*, pp.504-505, 514 n.35 ; Slack, 'Perceptions of the Metropolis', p.175 and n.68.

(14) ODNB., art. John Houghton, by A. McConnell ; D. Rutherford (ed.), *The Biographical Dictionary of British Economists*, vol.1, pp.558-559 ; Slack, *The Invention of Improvement*, pp.143 and n.75, 144-145.

(15) *The History of Parliament: The House of Commons 1690-1715*, vol. III , p.132.

(16) *A Discourse shewing the great advantages that New-Buildings and the enlarging of towns and cities do bring to a nation* (London, 1678). [版本B] 2019年、版本Aと同じ表題の原本を慶應義塾図書館（根津文庫・貴重書）で筆者が偶々発見し、第1ページの文章構成がAと異なっているのに気づいて複写したものである。

に至る箇所だけ、類似部分はあるものの記述が異なっている。続く版本Bのページ [2] 36行目から以降は、わずかな語句の異同を除いて版本A（ページ [2] 22行目以降）と、いくつかの印字の崩れやズレも含めほとんど同一記載である。そもそも版本AとBのタイトルページの表題を見ると、活字（ポイント・印字）、配列がほぼ同一である（ただし表題の下、罫線に挟まれて4つ並ぶ図形一異なる図柄1つ一の並び方を違えている）。筆者は、同一の印刷者によるものと推定するほかない。活字体の同一（活版共通）も明瞭で、例えば（[] 内は原文のページ表示。l.は行数）、p. [15] Iwprovements (l.2) は Improvements の、p. [17] eccording (l.3) は according の、uot (l.6) は not のいずれも誤植だが、誤植の字体までが同じである。

そして、版本Aではページ [1] 最上部に、タイトルページにある表題をあらためて記入しているのに対し、版本Bはタイトル表記を省略していきなり本文に入っている。結果としてページ [1] では版本Aは本文が27行なのに対しBは39行となり、記述量の不揃いが生じている。以下の3ページで行数や字数、記述内容を変えながら調整した結果、ページ [4] の下から2行目からページ数も行位置も同じとなり、[5] 以降は語句表記のわずかな相違を除いて同一の行数、内容となっている。両版を対比して困惑させられるのは誤記がそれぞれの異なった箇所に見られることで、ページ [1] の両版記載が共通する部分に範囲を限っても、例えば以下の如くとなる（l.は行数）。

綴りが適正	綴りが誤謬
版本A thought : l.6 though : l.14 losers : l.18 版本B another : l.8 wont : l.11	版本B though : l.5 thouhg : l.13 loserss : l.17 版本A nother : l.9 want : l.12

以上を踏まえ、版本A・Bのいずれも同一著者、すなわちバーボンのペンによる1678年の刊行、とひとまず推定してよからう。いずれかが別人による剽窃本である可能性は完全には否定されないにせよ、既述の如く冊子体裁やデザイン、印字状態などに鑑み、剽窃とは考え難い。

次に、版本AとBの記載の異なる部分（pp.1-2）の要旨を以下に対比させてみた。家屋やそれを建てるビルダーほど一国の富強に貢献する存在はないにもかかわらず、近年の疫病やロンドン大火に伴う打撃や経済不況に伴ってそれら（とりわけロンドン郊外の新築建物）がシティからトレードを奪い賃料も下落させ、カントリーから人口を減少させたといった批難の声が世間で高まっている、と憂慮する冒頭（共通）部分を受け、版本Aと版本Bでは概略次のような記述が続く。

バージョン A	バージョン B
<p>こうした批難の不当性を示すべく、新築の建物や市街の拡大が一国にもたらす大きな諸利点を明らかにする。すなわち新築建物がシティを貧困化し、カントリーの人口を減らすと見る建築反対論に答える。建物増加の真の原因は現今の平和や統治の成功を表わす人口増殖に由来していることを示す。これらが以後の議論の目的である。建物増加・市街拡大の利点は新築建物が人々を富ませ、国の勢威を増進させ、それ自体国の誉れとなり、歳入を増やし民の統治を一層たやすくして君主や統治者に利益をもたらすこと。⁽¹⁷⁾</p>	<p>こうした誤解や批難の不当性は以下に分明となろう。そもそも土地の所有権の存する場で君主や統治者に共通する関心事は、国力や領土を支える臣民人口の保持・増加と、あらゆる手段方策を講じて貧民（富者1人に貧者100人）に生計の資＝雇用を与えること、の2点に他ならぬ。土地所有権を支配する君主や所有主、富者の下で貧民に雇用をもたらす衣・食・住の提供のうち、最大の人員を雇用、従事させるのは家屋の建築及びその関連業域である。建築関連業が雇用を介して生ぜしめる利点は、第一に建物の増加は人々を富ませる。第二に建物は国力を増進、強化させる。第三に建物は国の誉れとなる。第四に国の歳入を増加させ、民を一層統治しやすくすることで君主や統治者に役立つ存在となる。第五に〈新築の建物がシティを貧困化させ、カントリーの人口を減少させる〉という建築反対論に回答、反駁できる。第六に建物増加の依ってきたる真の起源は、天地創造以来の、そして現今の平和と統治の繁栄に伴う人口増加にある次第を立証できる。ビルダーの活動を妨げることは住宅、雇用の欠如ゆえに人口増加と国の成長を阻み、その間に台頭してくる敵国に征服されかねない。⁽¹⁸⁾</p>

以上、バージョン A・B に見る異同部分の記述を比較すると、B は現下を念頭に置いた国家・政治意識が幾分強く反映されている印象で、加えて土地の所有権 property of Land (pp.1-2) なる表現が君主や地主階層の、貧民雇用を含めた役割などに関連して使用されている。B からは読み手、聴衆を意識した、整然たる広い論点を読み取れなくもない。

既述の如く本冊子を、バーボンが議会の動静を感じとってそれに反駁を試みて刊行した時論と想定すれば、今まさに、またしても厳しい規制が検討されている対象業種で事業を広く展開中のデヴェロッパ、さらに他日下院入りを考えている身として、彼は早くも焦燥感を抱いていたと察せられる。そこでフォーマルな体裁と急拵えの仕上げで、冒頭に続く部分だけ記述を書き換えてパンフレットを同時刊行したのか。フォーマルな体裁でパンフレットを発行したものの反響に不安を感じ、又は好評に促され、時を置かず冒頭に続く部分を書き改めて、言わば急拵えの追加改訂版を発刊したのか。あるいは急拵えのパンフレットを発行したものの仕上がりに不安を感じ、時を置かず冒頭に続く部分を書き直して、今度はフォーマルな体裁の改版を発刊したのか。現時点で筆者は、バーボンが本冊子の公刊を非常に重く見て、2種の版本を何らかの理由でほぼ同時・連続的に製作し、とりわけバージョン B は慌ただしく印刷させた、としか推論できない。いずれにせよ 1678 年が、(他

(17) 冒頭部分を含め、*A Discourse shewing the great advantages*… [A], pp.1-2.

(18) 冒頭部分を含め、*A Discourse shewing the great advantages*… [B], pp.1-2.

に2点発行していたとすればなおさら）バーボンにとって持論の公表を迫る何か背景事由の生じた時機だった可能性を、強く想定せざるを得ない。

さらにスラックも指摘する如く、バーボンは大都市の発展や都市規模の拡大、建物増加が一国の富強、統治を促すことを強調し、早くも『新築…』で都市論と関連付けながら「エミュレーション emulation = 競合」という用語と議論を展開している⁽¹⁹⁾。この競合とは、人の野心的な本性に由来し模倣や妬みを含む。バーボンによれば、「市街地住民の人口増加に伴って人々の間で競合 Emulation が増し、競合のなかから精励 Industry の気風が強まり、精励が富を増進させる…（中略）。労働と精励には重要な促進要因が二つあり、すなわち糧食の必要、及び競合である」。なかでも競合が生じるとそれに誘発されて技芸は向上し、精励の気風が長く続き、労働の途絶が抑止される。業種を問わず「職人 Artist の誰もが互いに他に打ち勝とう outvy と努め、永続的な勤勉精励を通じすべての人がそれ以前の境遇を改善すべく競って奮闘し、かくして人々は富裕になり、それが一国全体にとっての大いなる利点となる。そしてこの利点はもっぱら都市市街 Cities から生じる。人が孤立しているカントリーの状況では競合がほとんど生じないから」。バーボンが競合について論じたのは、『新築の…』のこの箇所が初めてである。ここでは都市間そして都市の職人、広くはトレイド従事者の間に生じる、生産へ向けた相互の競合が説かれている⁽²⁰⁾。その後、『ビルダー弁護論』で言及される「競合 an emulation」も同様な意味合いであった（out-live の語も併用されている）⁽²¹⁾が、『交易論』に至ってこの概念は拡大される。都市の膨張によって「人間には生まれつき野心がある Ambitious から、集まって暮らすと衣装・装具・家具 [の所有] において互いに他人より上に立とう Out-Vying とする過程で現われる競合を引き起こす」⁽²²⁾と彼が述べる時、いわば競争的な見せびらかしの消費 conspicuous consumption に近いものを認知していたことが了解されよう。ここで彼は共通して outvy (out-vye) [=outvie] なる動詞を用い、大都市の構築に伴って生産・消費両面で強く刺戟されていく継続的な競争マインドを示唆している。

スラックの指摘する通り emulation の語は同時代、ウィリアム・ペティらによっても用いられていたが、18世紀に至りバーナード・ドゥ・マンドゥヴィルによって一段と詳密に用いられるに至る。彼によれば「流行 Modes が実にさまざまに移ろい変化した後でも、独創的なさらなるもの a plus ultra が存在し続けるのは、こうした競争 Emulation を続け互いに負けまい out-do one another と努力していることのおかげである」⁽²³⁾。世間的モラルを脱却し、奢侈的消費などの役割を積極的に評価したマンドゥヴィルへと連なる系譜連続性の一端が、かかる部分にも見出され得るといえまいか。

(19) スラックは、バーボンとホートンが奢侈的消費及び大都市拡大に好意的世論を醸成する言語環境を整えた、と捉える。Slack, *The Invention of Improvement*, p.153.

(20) *A Discourse shewing the great advantages...* [A] [B], p.5.

(21) *An Apology* (1685ed.), p.33.

(22) *A Discourse of Trade*, p.69; 『交易論』訳書, 48-48頁

(23) Slack, 'Perceptions of the Metropolis', p.176; *The Invention of Improvement*, pp.142, 158, 209-210; C. H. Hull (ed.) (1889), *The Economic Writings of Sir William Petty*, ..., vol.1, p.290; ペティ著, 松川七郎訳 (1955) 『政治算術』, 105頁; [Bernard de Mandeville], *The Fable of the Bees* ..., the third ed. (1724), pp.133, 108-148; バーナード・マンデヴィル著, 鈴木信雄訳 『新訳 蜂の寓話』 108, 103-119頁及び337頁, 訳注46参照。

ただ、果たしてバーボンの文脈で説かれる emulation がスラックの説く「競争的消費の原動力」、[「バーボンは後の消費革命のあらゆる解釈に影響を及ぼし得るモデルを提供した」⁽²⁴⁾]といえるほどの含意や内実を具えていたか、筆者としてはにわかには論断し難い。むしろ「競合」の議論、プロセスの点で、スラックの挙げていない重要な先行用例がはるか以前に刊行されたサヴェイヤー（測量査定・積算士）兼地図製作者ジョン・ノードゥン（1547頃～1625年）の著述『サヴェイヤーの対話』（初版1607年）に読み取れることを、この際指摘しておく。バーボンの議論が都市間あるいは大都市での商品流通の上で主に生産・販売者及び消費者の間で生じる競合を対象としているのに対し、ノードゥンのそれは農村に看取され始めた土地保有市場のテナント・ファーマー間競合、つまり保有契約に際しレントやファインの付け値が競り上がるさま bidding and out-bidding を指す。このプロセスに登場人物の「サヴェイヤー」は「ある種の熱狂 madness」を感じ、「私は熱狂と呼ぶが、最良の意味においてそれは野心的な ambitious, あるいはどちらかといえば貪欲な競合 avaricious emulation で、そこでは最大の付け値を示して他を上回ろう outstrip と彼ら [=テナント] が互いに争っている」と語る。outstrip や outbid といった動詞は奇しくもバーボンの out-vye あるいは out-live に似て、emulation の様相を伝えている。対話者の「ファーマー」の発言からは、競合の動機が羨み envy や貪欲 avarice と解され、ノードゥンはこの語をどちらかといえば否定的に用いていることが察せられる⁽²⁵⁾。対してバーボンの主張を見ると、恐らく羨みも含んだ emulation のマインドを積極的に評価している⁽²⁶⁾。ともあれバーボンの論及より70年前のカントリーで早くも土地保有権をめぐるテナント間の競争インセンティブの現われが観察されていたのであり、emulation の語を駆使して萌芽的な市場マインドを表現する用法が彼及びベティを以て嚆矢としない事実は、ここで留意しておく必要がある。「競合」とそれを促すものへ向けた両者の視点は、漠然たる共通性を窺わせるとともに70年の推移、価値観の対照も際立たせている。

競争を伴う見せびらかしの消費に関連して、バーボンの用いる流行 fashion の語も看過できない。『交易論』において、衣服の変化などに見られるそれをトレードの重大な促進要素と見なし、「トレードを引き起こすのは精神的欲求 wants of the Mind, 流行、及び新奇で稀少なものに対する欲望 desire である」「新しい流行の促進は奨励されるべきものである。なぜならそれは人口の大きな部分に生計を与えるから」と捉えていることは雇用創出議論との関連で意味深い。『ビルダー弁護論』中、ローマ兵の様相を描写した際、彼らの見た目の派手さが、「あたかも流行 a fashion の如く、大衆が競う模倣 a popular Emulation のように流布して」と表現されている点にも着目したい⁽²⁷⁾。

近代的な市場や経済競争のマインド形成を伝える他の用語としては例えば、都市だけでなく農村に見る（地主による所有農地の、あるいは広義の）改良 Improvement への概ね好意的な言及が、早くも『新築の…』に現われていることを付記しておく⁽²⁸⁾。

(24) Slack, 'Perceptions of the Metropolis', p.176; *The Invention of Improvement*, p.145.

(25) John Norden, *The Surveyors Dialogue*,... (London, 1607), pp.8-10, 218; *The Surveyors Dialogue, ... Now newly Imprinted*,... (1610), pp.207-220.

(26) *A Discourse of Trade*, pp.62-63; 『交易論』訳書, 45頁

(27) *op. cit.*, pp.65, 67, 72; 訳書, 46-47, 50頁; *An Apology* (1685 ed.), p.14.

(28) *A Discourse shewing the great advantages*,... [A] [B], pp.2, 4, 12, 14-15.

加えて『新築の…』の中で一つ、大変意義深いのは、市街拡大を唱える都市論との関連で、以後益々重要となる産業分野、つまり観光業のメリットが強調されている点である。「都市の威容 greatness が住民にもたらす別の利点は、当地でお金を使ってくれ、概してこの上ない顧客層 Customers になってくれる多数の来訪者 strangers や旅人 travellers を見物へと招き入れることにある。珍しいものを観たいという、この好奇に駆られた気持ち humour からどれほど大きな利益が発生するか、についてはイタリアの住民が一番よく知っている。イタリアのいくつかの都市はそういった来客 Guests から得られる以外、生計の途 subsistence を持たないほどであるから」⁽²⁹⁾。かような言及は後の『ビルダー弁護論』、『交易論』には見当たらず『新築の…』に限定されるが、ここからも都市型産業とそれによる新規生業・雇用の創出へ注がれるバーボンの視線が明瞭に窺える。

以上『ビルダー弁護論』に新たに先行の（スラック指摘の3点のうち取りあえず）1点が追加されたバーボンの上記（2）の系統は建築産業論・市街地開発論として、俯瞰的な経済時論たる（3）の系統に分類される主著2点より短いものながら、総論とりわけ『交易論』へ連なる重要な前駆であると同時に、実体験を反映させたそれら自体、ユニークな分野の論考となっており、あらためて味読に値するといつてよい。

4 展望

以上、スラックによる発見などを介して、ニコラス・バーボンの著作のなかでロンドン市街地開発・建築論が重要テーマであることが浮び上ってきた。彼がこの領域を初めて扱った新発見の、そして実際上の処女著作となり得る論説（『新築の…』）は、筆者が確認した如く冒頭に続く部分を書き換えて同年に再刊されており、議会動向も注視した（市街地建築ビジネスを現に進行中の身として）バーボンの当該テーマへの執着が窺い知れる。都市型産業たる建築業の雇用創出と国家統治上の効果を強調しつつも、あくまで迅速な利得確保が彼の主眼であったことは否定できない。だが疫病蔓延や大火という惨事、世情不安に直面するなか、市街地復興、火災保険、土地銀行企画などと関連付けて、「プロジェクター」たる彼がテムズ川からの給水計画や孤児銀行設立といった一種の公益・社会的事業を内包する、広域の都市課題にも着眼していたことは意味深い⁽³⁰⁾。

そうしたなかで著作のうち系統（2）に属す、『新築の…』及び後年刊行の『ビルダー弁護論』（これも訂正の上、4年後再刊）は、まさしく「本業」の投機的建築業域に深くかかわる喫緊の問題をダイレクトに訴えた刊行物と見てよからう。筆者としては経済学史上における前出の系統（3）、保険史に見る系統（1）の重要性を踏まえつつ、近代ロンドン史あるいは国内資本主義市場の形成過程も射程に入れ、またトレードによる全体雇用の増大、国富並びに社会福利の増進が唱えられた論点を顧みたま、この度概容が判明した系統（2）を含めてバーボンの著述全体及び経歴を同時代

(29) *op. cit.*, p.8.

(30) バーボンの巨額な建築事業投資を介した石工や大工の雇用実績を、同じく下院議員だった北部の大地主サー・ジョン・ラウザーも在地管理人へ宛てた書簡で賞賛している（*The Correspondence*…, pp.510-511）。給水事業や孤児銀行については、さしあたり Brett-James (1935) *The Growth of Stuart London*, pp.345-346 ; Letwin, *The Origins of Scientific Economics*, p.54. and n.2.などを参照。

の文脈で詳しく見渡し、現今新たに考究する意義をあえて強調したいと思う。

(たかはし・ひろかず 慶應義塾大学教職課程センター非常勤講師／法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員)

【参考文献】

・史料文献（邦訳を含む）

現在バーボン自身の著作とされているものは、（邦訳を含め）一括して本稿第1節（67頁）に示した。

新規のものとして *A Discourse shewing the great advantages that New-Buildings and the enlarging of towns and cities do bring to a nation* (1678). [版本 A] (Slack (2000), 'Perceptions of the Metropolis in Seventeenth Century England', pp.175,176 and n.69. に註記のテキストは, D. Wing (comp.) (2nd ed.,1972-88), *Short-Title Catalogue of Books printed in England, ... 1641-1700*, vol.1, p.504 item D1620 の1点に表記があり, 上述の版本 A に該当する [eebo-0018 ; Gale Making of the Modern World Pt.1]. Slack (2015) *The Invention of Improvement*, p.143. など参照), 及び *A Discourse shewing the great advantages that New-Buildings and the enlarging of towns and cities do bring to a nation* (1678). [版本 B]

ダニエル・デフォー著, 岩崎泰男訳 (1994) 『十七世紀末の英国事情——デフォーの社会改善計画』同志社大学出版部

D. R. Hainsworth (ed.) (1983) *The Correspondence of Sir John Lowther of Whitehaven 1693-1698: A Provincial Community in Wartime.*

バーナード・マンデヴィル著, 鈴木信雄訳 (2019) 『新訳 蜂の寓話』日本評論社

John Norden (1607 ; 2nd ed. 1610) *The Surveyor's Dialogue.*

ペティ著, 松川七郎訳 (1955) 『政治算術』岩波文庫

・主な二次文献

S. Bauer (1890, Bd.21.N.F. *Nicholas Barbon. Ein Beitrag zur Vorgeschichte der klassischen Oekonomik.* (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik)

N. G. Brett-James (1933) 'A Speculative London Builder of the Seventeenth Century, Dr. Nicholas Barbon', *Transactions of the London and Middlesex Archaeological Society*, New Ser., vol. 6, pt.2.

N. G. Brett-James (1935) *The Growth of Stuart London.*

W. Letwin (1963) *The Origins of Scientific Economics: English Economic Thoughts 1660-1776.*

D. Rutherford (ed.) (2004) *The Biographical Dictionary of British Economists*, vol.1, art. Nicholas Barbon by L. Magnusson, pp.59-63.

O.D.N.B., art. Nicholas Barbon by R. D. Sheldon.

P. Slack (2000) 'Perceptions of the Metropolis in Seventeenth Century England', in P. Burke, et al. (eds.), *Civil Histories: Essays presented to Sir Keith Thomas.*

P. Slack (2015) *The Invention of Improvement: Information and Material Progress in Seventeenth Century England.*

J. Thirsk (1978) *Economic Policy and Projects: The Development of a Consumer Society in Early Modern England.*

The New Palgrave: A Dictionary of Economics (1987) vol.1, art. Nicholas Barbon by D. Vickers (1987), pp.189-190.

E. Cruickshanks, S. Handley, and D. W. Hayton (eds.) (2002) *The History of Parliament: The House of Commons 1690-1715*, vol. III., art. Nicholas Barbon by D. Wilkinson and S. Wynne, pp.131-133.

・主な邦語（邦訳を含む）二次文献

上田辰之助（1950；1987）『蜂の寓話——自由主義経済の根底にあるもの』新紀元社；みすず書房

大橋竜太（2017）『ロンドン大火——歴史都市の再建』原書房

木村栄一（1993）『損害保険の歴史と人物』日本損害保険協会広報部

杉山忠平（1963）『イギリス信用思想史研究』未来社

ジョオン・サースク著，三好洋子訳（1984）『消費社会の誕生——近世イギリスの新企業』東京大学出版会；文庫版（2021）『消費社会の誕生——近世イギリスの新規プロジェクト』（山本浩司氏による解説「新規事業プロジェクトからみえる近世と現代」も併せ参照）筑摩書房

ラース・マグヌソン著，熊谷次郎・大倉正雄訳（2009）『重商主義——近世ヨーロッパと経済的原語の形成』知泉書館

ラース・マグヌソン著，玉木俊明訳（2017）『重商主義の経済学』知泉書館

H. E. レインズ著，庭田範秋監訳（1985）『イギリス保険史』明治生命100周年記念刊行会